

南台人文社會學報 2014 年 11 月

第十二期 頁 141-165

尾崎雅嘉『古今和歌集鄙言』の送仮名

神作晋一 *

摘要

尾崎雅嘉『古今和歌集鄙言』（寛政 8 [1796]）是一部試著將『古今和歌集』翻譯成白話的作品。本研究是以『鄙言』中的白話譯文裡使用到的送假名為對象。將送假名分類成音節（文字）數、活用形式、活用形別、下接語的種類（接在助詞助動詞、動詞後的詞彙使以漢字表記還是假名表記等）等類別，並分析研究送假名的使用傾向。在同類型的作品中，本居宣長『古今集遠鏡』裡的送假名，即使是沿用著過去送假名的使用習慣，也會考量口語活用的特徵並為使接續關係表現得更加明確，而有多使用送假名的傾向。但是在『鄙言』中，在二音節動詞幾乎不使用送假名，接續上也不容易理解，在三音節以上的動詞中則使用著送假名等，這些送假名的使用方式都是直接沿用著過去的使用習慣，幾乎讓人感受不太到對讀者的顧慮。即使如此，書中在某些特定的字彙（動詞）上，即使那個字彙並無送假名，也幾乎都會標上注音假名。整體而言雖然說是為了年幼孩童所寫的作品，但單從文中送假名的使用來看，並不會感受到有任何特別的地方。

關鍵詞：送仮名、『古今和歌集鄙言』、俗語譯、動詞、形容詞

*神作晋一，南臺科技大學應用日語系助理教授

電子信箱：kanshin@mail.stust.edu.tw

收稿日期：2014 年 03 月 14 日，修改日期：2014 年 07 月 24 日，接受日期：2014 年 11 月 25 日

STUST Journal of Humanities and Social Sciences, Nov. 2014

No. 12 pp.141-165

尾崎雅嘉『古今和歌集鄙言』の送り仮名

神作晋一*

要旨

尾崎雅嘉『古今和歌集鄙言』（寛政 8 [1796]）は『古今和歌集』の俗語訳を試みたものである。本研究では『鄙言』の俗語訳部分の送り仮名を取り上げた。音節（文字）数・活用形式・活用形別、下接語の種類（助詞助動詞、動詞に続く語が漢字表記・かな表記であるかなど）、などによって分類し、送り仮名の傾向を分析・考察した。同種の本居宣長『古今集遠鏡』の送り仮名は、これまでの慣習を踏襲しながらも、口語の活用の特徴を考慮し接続関係をはっきりさせるなどの配慮で、送り仮名を多く送る傾向があった。しかし『鄙言』は二音節動詞の送り仮名がほとんどなく、接続もわかりにくい。三音節以上の動詞は送り仮名があることなど、これまでの慣習を踏襲した形で送り仮名を運用しており、読みに対する配慮というのはあまり感じられない。それでも、送り仮名のない語でも、ある特定の語（動詞）については、ほとんどすべてに必ず振り仮名が示してあるという状況であった。「児女幼童の為」というような執筆意図とされるが、送り仮名表記の面では特別な現象が見られないというような状況であった。

キーワード：送り仮名、『古今和歌集鄙言』、俗語訳、動詞、形容詞

*神作晋一、南臺科技大學應用日語系助理教授

電子信箱：kanshin@mail.stust.edu.tw

收稿日期：2014年03月14日，修改日期：2014年07月24日，接受日期：2014年11月25日

一、口語文の送り仮名

尾崎雅嘉『古今和歌集鄙言』(寛政八 1796 年、以下省略時は『鄙詞』とする)は『古今和歌集』の歌について、口語(俗語)で訳をつけた文献である。書誌的・資料的に検討され¹、古今集の注釈として、近世上方語の資料として、語法等の研究もいくつかなされている²が、表記法などでは仮名遣いが取り上げられるくらいで、送り仮名を取り上げたものは管見の及ぶ限り見られない。

この時期(近世)の送り仮名や語表記については、早くから池上禎三(1955、1957、1982)の指摘がある。池上氏は江戸後期滑稽本の実態にふれ、「漢字一字につき二音節の基準」ということを述べている。

実態の調査としては、原口裕(1989)の詳細な調査があり、室町時代後半から現代までをたどる中で『好色一代男』(天和二 1682 年刊)、『雨月物語』(安永五 1776 年刊)、『南総里見八犬伝』(天保一一 1844 年刊)の三作について、活用語の音節数と振り仮名の関係から送り仮名の分析を試みていて注目される。原口氏はその中で

- 二音節動詞は振り仮名が二音節のため送り仮名は振り仮名による表記になる。
- 三音節動詞、四音節動詞の活用語尾は送り仮名で示すが、四音節動詞の場合振り仮名が三音節になるため、時折三音節動詞の活用語尾が振り仮名になることもある。
- 『南総里見八犬伝』では二音節動詞の送り仮名表記が増えている。という指摘をされている。

また、狂言の古写本について調査した坂口至(1987)でも、

¹ たとえば管宗次(1982、1983)伊藤雅光(1982)、など

² 高瀬正一(1987)、山本淳(1996)、後藤剛(1989)など

- I 二音節目までは原則として送り仮名を分出しない
- II 三音節以上は様々であるが、送らないものも多い。

と音節数とのかかわりに言及されている。

さらに送り仮名と音節数については菊地圭介（2000a）が定家本の動詞表記について、また同じく菊地圭介（2000b）では石川雅望（1754～1830、狂歌師、国学者、戯作者）の「おくりがな法」について論じており、ますます送り仮名と音節数の関係が重要視される傾向にある。

神作晋一（2001）では宣長がもっとも活発に出版活動を行っていた時期（寛政年間）の著作（『菅笠日記』『玉あられ』『宇比山踏』）を調査し、三音節動詞にほとんどゆれが見られないことなどから、それまでの慣用を考慮しながらも、読みやすさへの配慮のために、かなり意識的に統一されていたということ述べた。

また神作晋一（2005）では、『鄙言』と同種の著作である本居宣長の『古今集遠鏡』（寛政九 1797 年刊、以下略称は『遠鏡』）の送り仮名を取り上げ、それまでの慣習を踏襲しつつも、二段動詞の一段化などの口語の活用の特徴を考慮し、接続関係をはっきりさせるため送り仮名を多く送る傾向があることを見出した。

なお、口語資料の送り仮名を考察することの意義として、坂口至（1989）では、「伝統的な文法的接続以外の文脈においても多くの送り仮名を観察できる利点があること。」と述べ、より多くのケースを材料として得られることを指摘している。

本研究では、この『鄙言』の訳文部分を取り上げて、その送り仮名を考察するが、文語と口語の違いを念頭におきながら、『鄙言』の特徴を探り、この期の表記の実態を考察していきたい。

二、資料の性質

『古今和歌集鄙言』は、後藤剛（1989）によって、すでに翻刻や解題がなされている。この項では、主に後藤剛氏のものを頼りに資料の性質を確認しておきたい。

2-1 書誌的情報

『古今和歌集鄙言』は寛政八（1796）年の出版（出板）である。後藤剛によれば「板本には、冊数や刊記の相違から、数種のもものが認められているが、板本は同一のものであり、その字体から、著者尾崎雅嘉自身の版下による出版と思われる³。」とされている。したがって、この資料の送り仮名などの書写も尾崎雅嘉自身の意識が反映されたものと見てよいだろう。

2-2 書写態度について

『鄙言』の書写態度については、『遠鏡』にあるような凡例や序論にあたる「例言」の記述はないが、巻末の著者自身による跋文に次のような文がある。

無下にちうさくふみのさまを見しらぬ児女の為にとてつねのことはをもて哥のこゝろをのへたれはすへて時俗のくちふりにしたかへり

されハかなつかひのさたかならぬともいひのなめけなるとを見て大方の目にいふかることなかれといふ

この部分に関しては後藤（1989）に次のような引用がある。

また、同じ尾崎雅嘉による『群書一覽』（享和二（1802））には、

³ 鹿田文一郎（1932）「國学者としての翁は晩年迄筆硯を棄ず数多くの著述が物された、根気つよくて、能書で、殊に翻字を得意としてゐたから、生涯の著述刊刻するに皆自筆にて書いた。（中略、古今和歌集鄙言六冊など）等は皆自筆版下によって刊行され廣く世に流布している。」

古今集の歌を俗語に譯して頭書とすその意ハもつはら契沖の餘材抄にしたがひかたはら顯注密勘の説をとれり注釈の書を見てもわきまへがたくする児女の一覽してそのおほむねをさとるべきたよりとす。

その他、「目白学園総合図書館本『鄙言』巻末造板目録」には

「古今和歌集の注解「袖ひちて結ひし水の。歌の頭書に。袖をひたして手をぬらしてくみたる水などへ。俗語をもて注したれハ児女幼童にも哥の意を知る事此書にまさるものあらじ」 後藤剛 (1989)

これらを見ると、どの資料も「児女幼童の為」を繰り返し用いていることから、当時知られていた注釈書を見ても理解ができないであろう子供たちでもわかるような「通俗を旨とした執筆意識を見ることができる」となっている。

2-3 仮名遣いなど

後藤 (1989) では『古今和歌集鄙言』のオ・ヲの仮名遣いについて、定家仮名使いが使用されているという報告をし、定家仮名遣いが使用されている理由として、

- 1、使用した「古今和歌集」の底本が、定家仮名遣いであった。
- 2、尾崎雅嘉自身が、定家仮名遣いの使用者であった。
- 3、尾崎雅嘉は、歴史的仮名遣いに関する知識はあったが、何らかの事情で、敢えて定家仮名遣いを使用した。

というのを挙げている。

送り仮名表記の面ではどのような特徴が現れるだろうか。以下の項で考察してゆきたい。

三、調査手順について

『古今和歌集鄙言』の版本とそれを元にした後藤剛（1989）の本文にある訳文部分（歌、詞書、左注）の動詞（補助動詞）・形容詞を対象とする。ただし、いわゆる転成名詞や「初めて（207）」⁴などのような、意味・用法上は他の品詞に転成したものも含む。動詞・形容詞については、活用語で送り仮名として問題となる主要なものであり、どの先行研究においても見解が一致している。

語の認定は、『日本国語大辞典第二版』などの辞書を参照して、複合語と見られるものも、（「思召す」のような固定化したものを除き）できるだけ細かく分けた。たとえば「聞入らずに（70）」とある場合、これらを一語に見るのではなく、「聞く」と「入れる」に分け、それぞれの活用語尾と下接語を考えるものとする。

動詞・形容詞は表記形態によって次のように分類する。

1. 漢字書きのもの

例 思ハぬ事ハ（593）、恋しい人に（673）

2. 漢字書きで振り仮名を付けたもの

例 ^{スギ} 過て行（898）^{チカ} 近うなつたわい（440）

3. 仮名書きのもの

例 わすれふとおもへども（569）かなしいとおもふ（369）

番号に従って仮名が増えてゆくが、このうち1、2が今回の調査対象となる。

原則として枠組みは文語文法で、音節数・活用形式・活用形（＋下接語）に分けた。しかし、現代語の活用になっているものが多く、二段活用は一段活用として考えた。そのため、あとに示すように自他

⁴ 以下用例の表示は新編国歌大観などで一般的に使用される歌番号を用いている。

の対応が

「 n 音節四段動詞」

「 $(n+1)$ 音節一段動詞」

となっている。

1 動詞・補助動詞

文語文法を基調とした口語文法の体系に統一する。

☆異なり語の段階

○音節（文字）数・活用形式

①二音節動詞（四段動詞以外）

A 旧一音節動詞（カ変・下一段）、B 上一段動詞、C ラ変動詞、
D ナ変動詞、F 下一段動詞

②二音節動詞（A 四段動詞）、三音節動詞（B 上下一段動詞【旧上下二段】）

③三音節動詞（A 四段動詞）、四音節動詞（B 上下一段動詞【旧上下二段】）

④四音節以上の動詞（A 四段動詞）B 上下一段動詞（旧上下二段）

* 自他のペアの表示が、文語と違ってくる⁵。

☆同じ語の段階

○活用形

1 未然形……表中「1 未然」「1 う・よう」などとする。

2 連用形……意味・下接語から次の通り分類する。

- 転成名詞……表中「2 名詞」
- 連用中止……表中「2 中」

⁵ たとえば、「切る」「立つ」などは文語なら終止形が「切る」「立つ」で、音節数も同じだが、口語では、一段活用になると「切れる」「立てる」になり、音節数も変わってくる。つまり一段活用の動詞の終止形が一音節ずつシフトされる。

- 接続助詞「て」……イ音便・ウ音便・撥音便・促音便・通常形（不明形）
- 助動詞「た」……イ音便・ウ音便・撥音便・促音便・通常形（不明形）
- 「て」「た」以外の助詞・助動詞⁶……表中「2助」
- 複合語の前半部、連用修飾などを含めた上記以外の連用形（さらに下接語が漢字か仮名かで分ける）……表中、下接語が漢字の場合「2複」、仮名の場合「2前」とする。

3 終止形……表中「3終止」、その他助詞の接続などで「3と」「3べし」などとする。

4 連体形……表中「4連体形」とする。

5 已然形（仮定形）……表中「5確条件」などとする。

6 命令形……表中「6命令」とする。

2 形容詞

- ・ク活用、シク活用の別、さらにカリ活用の別
- ・活用形の分け方は動詞に準ずるが、それ以外に「…さ」「…み」などの語幹の用法が加わる。
- ・その他も動詞の場合に準ずる。

また、所在表示は、『新編国歌大観』（角川書店）などに使われている歌番号に従い、「(769)」のように行なう。

⁶ 一部、転成名詞と重なる部分がある。

四、調査結果・考察

1 動詞・補助動詞

表 1-1

音節数・表記形式別

音節数	活用形式	異なり	1 漢字	2 振仮名	総計
2	力変	1	70	1	71
	ナ変	1	5	13	18
	ラ変	2	450	1	451
	下一段	3	46	5	51
	上一段	3	233	1	234
	四段	35	511	83	594
3	下一段	21	185	36	221
	上一段	8	74	25	99
	四段	35	371	53	424
4	下一段	15	79	12	91
	四段	4	5	1	6
5	下一段			1	1
	四段	5	25	1	26
総計			2051	233	2287

表 1—1 は全用例を音節数・活用形式・表記形式に分類したものである。「1 漢字」は漢字書きのもの、「2 振仮名」は漢字書きに振り仮名をつけたものとなっている。振り仮名付きが多いのは 3 音節動詞である。

表 1—2 は活用語尾の有無を示したものである。「0」は上一段動詞（「見る」「できる」など）のように語幹と活用語尾が峻別できず一致してしまうような語である。「1 なし」は活用語尾の表記がないもの、「2 不十分」は一段活用の連体形などで「…る」（染る、消る、落る）のような表記になっているものである。「3 あり」は活用語尾が表記されているもの、「4 語幹」は活用語尾より前の語幹に当たる部分がかな

書きになっているもの⁷である。

また、表1-3、1-4、1-5をこの論考の最後に掲出した。表1-3音節数・活用形式別の表記形式は、表1-1のデータをさらに細分化したものである。表1-4下接語別の送り仮名表記、表1-5下接語別表記形式は、下接（後続）語によって動詞の活用が変わるのだが、送り仮名の表記や振り仮名の有無などに違いがあるかどうかを示そうとしたもので、参考として掲出した。

表 1-2

活用語尾の有無

音節数 2	表記形式	0	1 なし	2 不十分	3 あり	4 語幹	総計
2	1 漢字	340	923		52		1315
	2 振り仮名	7	81		15		103
3	1 漢字	108	152	21	349		630
	2 振り仮名	2	49	13	50		114
4	1 漢字		4		78	2	84
	2 振り仮名		3		10		13
5	1 漢字		2		23		25
	2 振り仮名				1	1	2
総計		457	1214	34	578	3	2286

①二音節動詞（四段動詞以外）

A 旧一音節動詞（カ変・下一段）

来る（カ変）

出る、寝る、経る（下一段）

- ・「来」71例 「来た旅の道ハ（415）」「来てみる人（68）」「来もせぬ人（770）」「来ると（463）」「来る人も（203）」「来る方じや（1003）」

⁷ 埋もれて（650歌）、遣ハされた（736詞書）、遣ハされた御ふみも（736歌）など

など

- ・「出」49例 「出ぬので (308)」「出るやうに (633)」「出てさいた (0949)」など
- ・「寝」1例 「寝ても見える (833)」
- ・「経」1例 「経て (439)」

文語で一音節だった動詞は、やはり、(終止・連体・已然・命令形は)二文字目の活用語尾を送っている。また振り仮名付きのものは少なかった。

B 上一段活用

に 似る、見る、居る

- ・「にる (似)」2例 「似たさくら花 (73)」「似たやうな (692)」
- ・「みる (見)」222例 「見てハ (60)」「見ますれば、(854)」「見わたす野邊 (868)」「見るやうに、(682)」「見れば、(644)」など
- ・「ゐる (居)」1例 「居所^{キドコロ}へ (855)」 振り仮名付きの確例⁸

(文語での)上一段動詞は、文語の場合と同じで、(終止・連体・已然・命令形は)二文字目の活用語尾を送っている。(未然形と連用形は語幹と活用語尾が重なる。)

C ラ行変格活用

あ 有り

- ・「有」451例 「有たが (315)」「有た時に (740)」「有て (889)」「有ふ、(94)」「有ふけれども (63)」「有まいのに (796)」

⁸ 「居」については、「ゐる」なのか「をり」なのか、振り仮名がなければ判別しがたい物が多い。よって、ここでは振り仮名付きの確例以外は、用例としては取り上げていない。ちなみに判別しがたい例は219例であった。

・「居」振り仮名つきの確例なし

「あり」については、『遠鏡』にはなかった漢字書きの例がかなり出て来ている。現代仮名使いなら「あろう」となるところが「有ふ」となっている例が多い。また、「をり」の振り仮名付きの確例はなかった。

D ナ行変格活用

死ぬ、

・全 18 例、(振り仮名 12 例)

a 「死ぬる物かと (518)」「死んでしまへ (526)」「死んだ跡で (571)」

「死んで居る (613)」など

b 「死んだ人と (850)」「死なれまする (854)」「死にハする (492)」

「死ぬる事ハ (517)」など

c 「死る (551)」「死だにして (654)」「死でしまふた (909)」

・「こいしぬ (恋死)」 4 例

「恋死にハする (492)」「恋死んだなら (603)」

※「死ぬ」の内数に含む。

「恋しんだら (654)」「恋しぬるとても (661)」

※ひらがな書きなので内数に含まず。

「しぬ」は 18 例だったが、b のような「死」という振り仮名付きの例が多い。c は活用語尾 (あるいは一部) が振り仮名に含まれている。

「～だ (た)、～で (て)」の付く例は、これまでの研究でもそのような傾向があった。それ以外では、体言 (名詞) としての「死」と音節を合わせようとする意識であろう。

ちなみに「こひしぬ」はやはり「しぬ」と同じで、「し」までが語幹であった。漢字部分の持つ音節数を一致させるということだろうか。

また、「恋…」という他の語の影響なのか、ひらがな書きの「死ぬ（しぬ）」があった。直前の構成要素が漢字の場合、ひらがなにするというような意識が働いたのだろうか。

②二音節四段動詞と三音節一段動詞

A 四段活用

逢^あふ、往^いく、云^いふ、言^いふ、入^いる、浮^うく、打^うつ、追^おふ、刈^かる、茹^かる、
 狩^かる、聞^きく、切^きる、咲^さく、知^しる、住^すむ、出^だす、立^たつ、手折^{たをち}る、散^ちる、
 摘^つむ、泣^なく、鳴^なく、啼^なく、張^はる、引^ひく、吹^ふく、降^ふる、待^まつ、召^めす、
 持^もつ、行^ゆく、置^をく⁹、織^をる、折^をる

これらの動詞は、文語と同じく活用語尾を大文字で送ることはなく、振り仮名付きの場合も送り仮名が振り仮名部分に含まれる。

「待ふぞ (366)」「行ぬのかと (720)」「逢ませふと (454)」「咲まし (445)」、「聞たのも (641)」「鳴て居る聲が (998)」「逢みることが (531)」「立わたつて (176)」「引こもつて (80)」「待といふ (162)」「逢事が (483)」「行水のやうに (1001)」「吹^{フイ}て (946)」「行^イたり (785)」「行^イて (202)」「降^{フツ}た雪の (566)」「置^{ライ}たらば、(268)」「置^{ライ}て(100)」「咲^{サク}べき(445)」「摘^{ツム}やうに(1031)」

特に「て」「た」が続く場合（「て」131例、「た」37例）は、音便形だか非音便形だか分からない、つまり音便かどうかについて表記上は注意が払われていないものである。また、「行ば (637、0918)」は、元の歌の表記や文脈などから「いけば」とよめるところではあるが、

⁹ 歴史的仮名遣いは「おく」であるが、『古今和歌集鄙詞』では「をく」となっている。

「行ば」とあれば「いかば」「いくは」とも読まれてしまうので、この部分も漢字書きに読み方の配慮があまりないといえる。

振り仮名のついているものも多く見られた。特定の語に振り仮名付きのものが集中しているという傾向がみられる。たとえば「すむ住」「をく置」はそれぞれ8例あったが「住ました在所(248)」「置なされて(346)」を除くと、その他はすべて振り仮名付きであった。

例外は、「出す」(38例)の表記である。これは構造上(い^ダ出す→出すという変化)、このような表記になるであろう。また、

「知つた事じや(438)」「知つた事で(812)」「知つたの(477)」

「知つてくれゝれば(535)」(4例)

があるが、これらは「知る」が「～た」「～て」に接続するときの音便形表記である。

その他、大文字の送り仮名が付されているものをあげてみると次のようになる。

「入る人もないハ(924)」「咲きはじめてた所と(280)」「散る、(850)」

「張るといふ(25)」「逢ハせまいのに(903)」「逢ハつしやる(612)」

「住んで(747) ※ママ」

ラ行活用が3つ、「逢」が3つなどとなっている。ラ行のものは『遠鏡』でも多かったが、ラ行のものは接続関係をはっきりさせようとする配慮が働くようである。

B 下上一段活用（旧下上二段活用）

明^あける、上^あげる、荒^あれる、出^いでる¹⁰、入^いれる、起^おきる、枯^かれる、消^きえる、始^はめる、初^そめる、染^そめる、絶^たえる、立^たてる、付^つける、名^な付^づける、晴^はれる、見^みえる、見^みせる、分^わける、終^おえる、折^おれる（以上、下一段）

生^いきる、老^おいる、起^おきる、落^おちる、借^かりる、恋^こひる、過^すぎる、出^で来る¹¹（以上、上一段）

これらの語は文語では終止形が二音節で、四段活用の二音節動詞と自他の対応があるものもある。活用語尾は漢字部分に含まれており、振り仮名の部分に活用語尾が含まれている。（なお、「見える」「見せる」は構造上「見る」と同じようになるので、送り仮名の問題はないといえる）

「見えぬいたぞ（340）」「見せふと（100）」「明てしまふた（635）」「明るハ（1071）」「上る藻の中に（807）」「消るあわともなり（827）」「染るので（258）」「分たあさの（622）」「落たと人に（226）」「恋こがれるの（732）」「生て（347）」

「染^{ソメ}てをいた（869）」「明^{アケ}るのを（625）」「入^{イレ}ずに（884）」「入^{イレ}たいれひもの（541）」「老^{オイ}が（349）」「消^{キエ}るといふ（885）」「出^デ来^キました（997）」「起^{オキ}て居て（1030）」「過^{スギ}る年（893）」「落^{オチ}るとハ（930）」

例外は「入れふとしたら（424）」だけである。「入る←→入れる」の関係からであると考えられるが、その他の例（「知れる」など）があればもう少し考える材料があるのだが、送り仮名で活用をはっきりさせようという配慮はあまりなかったようである。

¹⁰ 「御出なされても（738）」などを「いでる」とした。

¹¹ 文語では「いでく」の形をとり、なおかつ「カ変」の活用をするので便宜上一音節動詞の「く（来）」とおなじようにあつかったが、今回はここに入れた。

③三音節四段動詞と四音節一段動詞

A 四段活用

あ 明かす、あ 上がる、あそ 遊ぶ、いの 祈る、おも 思ふ、かす 霞む、かのう 叶ふ、かへ 帰る、かよ 通ふ、
く くだ 下る、こほ 氷る、しの 忍ぶ、す 過ごす、そ 染まる、たの 頼む、い 違ふ、つか 使ふ、つく 作る、とお 通
す、とお 通る、とま 泊る、なげ 歎く、にな 荷ふ、にほ 匂ふ、ねが 願ふ、のこ 残す、のこ 残る、のぞ 望む、のぼ
る、まも 守る、まを 申す、めぐ 恵む、やす 休む、わた 渡る、をは 終る、

これらはみな活用語尾を表記していて、振り仮名も語幹部分に限られる。

「遊バした時 (21)」「思ハずに (351)」「思ハれることかな (415)」「思ひの火が (790)」「思ふた事かい (786)」「思ふてくれぬ人 (521)」「思ふによつて (36)」「思へば (187)」「通りの香に (42)」「匂ふ春さきにハ (39)」「下つてきた (872)」「通りに (347)」「通して (492)」¹²「残すやうに (996)」「終るのを (965)」

音便形に関しては、ほぼすべて「思ふて」などのように「ふ」となっている。

原口 (1989) で指摘された「申す」は、「申す」系 6 例、「申」系 22 例となり、活用語尾の表記されないものが多い。三音節四段動詞全体から見れば例外であり、「申す」の特色と言える。

活用語尾が送られなかったのは以下のとおりである。

アガ 上りまして (1000)、思ておわかれ (396)、頼にも (390)、恵の (1095)

「上る」は活用語尾があるが、他に「あげる」や「のぼる」があることを考えると、読みを確定するものとしては送り仮名が不十分で

¹² 「通す」の 4 例はすべて振り仮名付きであった。「通る」も 38 例中 20 例が振り仮名付きであった。

ある。「頼」「恵」は名詞形となっている。この3つについてはそれを振り仮名で補っているといえる。そうすると、活用語尾の表記がないままのものは「思て」の1例だけとなるが、他の「思ふ」は「思ふて」のように書かれているから、単純に書き落としたということではないだろうか。

以上のことを考えると、三音節の動詞は表記がほぼ安定しているといえるだろう。

B 上下一段活用（旧下上二段活用）

生まれる、^う治める、^{おさ}恐れる、^{おそ}覚える、^{おぼ}仰せる、^{おほ}重ねる、^{かさ}数える、^{かぞ}聞こえる、^き下さる、^{くだ}尋ねる、^{たず}仕へる、^{つか}傳へる、^{つた}流れる、^{なが}初める、^{はじ}別れる、^{わか}（以上一段）

これらの語は文語では終止形が二音節で、四段活用の三音節動詞と自他の対応があるものである。二音節目までが漢字部分で活用語尾が送られている。

「^{オサ}治め遊バしまして(279)」「^{オン}恐れ入て(1002)」「^{オン}恐れながら(279)」「^{オン}覚えませぬ(646)」「^{オン}重ねて(359)」「^{オン}聞えるが(499)」「^{オン}下さるな(719)」「^{オン}尋ねてくれる人も(780)」「^{タズ}尋ねてまいらふぞ(391)」「^{ナガ}流れの(1084)」「^{ナガ}流れる水が(793)」

例外は次のようなものである。

「^{ナガレ}仰らるゝハ(418)」「^{ナガレ}仰られたゆへ(418)」「^{ナガレ}流て(721)」「^{ハジメ}初てくる(349)」「^{ワカレ}別がおしうハな(385)」「^{ワカレ}別も(900)」

「仰」は6例あるが、「おほせ」までが漢字部分となっているものがこの2例だけで、あとの4例は「仰せ…」となっている。「流て」「初て」は「て」が接続され、振り仮名を補っている。また「流れる」（全8例）では、送り仮名がないものはこの1例だけであり振り仮名が付

されている。「わかれる(別)」は10例あるが、先の2例以外は「別れ」と「～れ」が送られている。振り仮名付きのものを含むと、読みを補っているものが多いということが分かる。

④四音節以上の四段動詞と五音節一段動詞

A 四段活用

おほ め き め しあは たてまつ たま つか
 思し召す、聞こし召す、仕合せる、奉る、給はる、遣はす、
 つかうまつ はうむ ものおも
 仕る、葬る、物思ふ

活用語尾を送るが、音便の部分も分かるようになっており、自他の対応のあるものは不変化部分を送っている。語幹部分の音節数を揃えていると考えられる。

「思し召出されて(346)」「奉つた(885)」「奉りませふ(970)」「物思ひの数(590)」「遣ハされた(736)」「遣ハされた御ふみも(736)」「給ハつた事じやが(1003)」

B 下一段活用 →なし

2 形容詞(表2)

①ク活用

あか あさ あり あを うす おほ おそ おも くろ こ
 赤い、浅い、有がたい、青い、薄い、多い、遅い、重い、黒い、濃
 いろ しろ たか ちか と とほ なが はや ひろ ふか ふる
 い、白い、高い、近い、疾い、遠い、長い、早い、廣い、深い、舊
 ほそ まちどお
 い、細い、待遠い、

②シク活用

あたら いや おな こひ たの ひさ まちどほ
 新しい、賤しい、同じ、恋しい、頼もしい、久しい、待遠しい

表 2

形容詞 (表記形式別)

活用形式	異なり	総計	1 漢字	2 振仮名	3 一部
ク活用	22	135	110	21	4
ク活用カリ					
シク活用	7	136	130	4	2
シク活用カリ	1	1	1		
総計		272	241	25	6

形容詞の大部分はク活用シク活用と、どちらも「し」以下の部分が送られている。振り仮名も語幹部分に限られる。

「多いものじやが (404)」「黒いかみの色が (460)」「白うきれいなハ (272)」「高いによつて (494)」「早う月が (884)」「深い淵の (722)」「恋しかりそふな (426)」「恋しいやうに (839)」「同じ枝じや (255)」

「浅みこそ (618)」「濃^コさに (851)」「高さに (579)」

「遠ざかるやうに (995)」「長生さしても (355)」

例外は、

「新^{アタ}らしう作られた (1051)」「頼^{タカ}もしう (390)」「頼^{タカ}もしう思ハせて (569)」

「頼」については、「頼みにハ (443)」などの例があることを考えると、(少ない例ながらも) 自他の対応の他、同じ用字の動詞と形容詞、共に語幹部分を同じくしようとしていると考えられる。

五、まとめ

以上、『鄙言』の例について、今まで述べてきたことを挙げてみると次のようになる。

1. 三音節四段活用と四音節以上の動詞は活用形にかかわらず活用語尾が送られていて、音便形になる活用語尾も書き表されている。
2. 二音節四段活用動詞は、「た」「て」が接続する場合は、活用語尾を書かず、音便形か非音便形にもあまり注意が払われていない。
3. 特定の語においては、ほとんどにすべての場合に振り仮名が付されていることがある。
4. 漢字部分の音節数を一定にしようとしている傾向が見られる。自他の対応を意識した場合と、動詞と形容詞など複数の品詞に亘って同じ用字を行う場合とがあるが、その結果活用語尾よりも前の部分から送ることにもなる。
5. 形容詞はク活用もシク活用も語尾を過不足なく送って安定した表記になっているが、同じ用字を持つ他品詞との関係から4にしめたように活用語尾よりも前から送られる場合がある¹³。

以上のように、これまでの慣習を踏襲した形で、送り仮名を運用しているように見受けられる。

これは、「俗語をもて注したれハ儿女幼童にも哥の意を知る事此書にまさるものあらじ」とあり、他の版本でも「儿女幼童の為」と述べているように、たしかに、初学者のような読者を意識したものと考えられる著作であるとはいえる。

しかし、送り仮名表記においては、これまでの慣習を打ち破ることはできなかった（あるいはしなかった）。そのため、読みに対する配慮があまりないという部分が出て来てしまっている。

一方で、一部の特定の語にはほとんどすべてに振り仮名をつけて

¹³ 現行の「(改定) 送り仮名の付け方」には、音節数に関する言及は見られないが、通則二の本則に「活用語尾以外の部分に他の語を含む語は、含まれている語の送り仮名の付け方によって送る」とある。

いるという状況もあり、その部分が、(決して十分とは言えないものの) 初学者のためという部分での意図や配慮というものではないだろうか。

今回、俗語訳部分の送り仮名に関する成果を掲出した。今後は、文語で書かれた歌の部分や、歌と俗語訳両者を含んだ動詞のかな書きの部分などを含めた表記意識をさぐることを課題としたい。

参考文献

- 池上禎三（1955）「明治以来の正書法」『言語生活』46 p. 22-23
- 池上禎三（1957）「国語表記法の諸問題」『続日本文法講座2』 明治書院 p. 25
- 池上禎三（1982）「表記の歴史から見た現代語」『講座日本語学2』 明治書院 p. 8
- 伊藤雅光（1982）「『古今集遠鏡』・『古今和歌集鄙言』間の剽窃問題について」『国語研究（國學院大學）』45 1982-2
- 鹿田文一郎（1932）「尾崎雅嘉について」『上方』14 1932-2
- 神作晋一（2001）「本居宣長の送り仮名意識——寛政期の板本三作を対象として——」『国語文字史の研究6』 和泉書院
- 神作晋一（2005）「『古今集遠鏡』の送り仮名——口語表記の与えた影響——」『國學院雑誌』106-5 2005-5
- 管宗次（1982）「尾崎雅嘉年譜」『青山語文』12 1982-3
- 管宗次（1983）「尾崎雅嘉年譜補遺」『青山語文』13 1983-3
- 菊地圭介（1996）「おくりがな」「すてがな」の語史」『語文（日本大学）』94 1996-3
- 菊地圭介（2000a）「藤原定家自筆かな文献における動詞表記について——いわゆる「おくりがな」を漢字とかなの使用法の中に位置付けて考える——」小久保崇明編『国語国文学論考』笠間書院
- 菊地圭介（2000b）「石川雅望の「おくりがな法」について」『解釈』46-5・6、2000-6
- 後藤剛（1990）『古今和歌集鄙言』の仮名遣い—オ・ヲの場合 『中央大学国文』33 1990-3
- 後藤剛（1989）『古今和歌集鄙言の国語学的研究〈影印・翻刻篇〉』武

蔵野書院

後藤剛（1996）『古今和歌集鄙言の国語学的研究〈索引篇〉』武蔵野書院

坂口至（1989）「近世初期の送り仮名——和泉流古狂言『和泉屋古本』の場合——」『国語国文研究』25 1989-9

高瀬正一（1987）『古今和歌集鄙言』における俗語訳 —『古今集遠鏡』と比較して—『国語国文学報』44 愛知教育大学国語国文学研究室 p. 117-130

永野賢（1973）「本居宣長『古今集遠鏡』の俗語文法研究史における位置」『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』24 1973-2

原口裕（1989）「近代の送り仮名」『漢字講座4 漢字と仮名』 明治書院

山本淳（1996）「古今集」俗言解に見える主格表示—『遠鏡』『鄙言』間の訳出の差異から『米沢国語国文』24

表1-3 音節数・活用形式別の表記形式

音節数	活用形式	総計	1 漢字	2振 仮名	3 一部
2	力変	71	70	1	
2	ナ変	18	5	13	
2	ラ変	451	450	1	
2	下一段ダ	49	45	4	
2	下一段ナ	1	1		
2	下一段ハ	1		1	
2	上一段ナ	2	2		
2	上一段ハ	9	9		
2	上一段マ	222	222		
2	上一段ワ	1		1	
2	四段力	255	221	34	
2	四段サ	44	41	3	
2	四段タ	111	104	7	
2	四段ハ	63	54	9	
2	四段マ	9	2	7	
2	四段ラ	112	89	23	
3	下一段力	34	28	6	
3	下一段方	14	12	2	
3	下一段サ	14	14		
3	下一段タ	1	1		
3	下一段ダ	13	13		
3	下一段マ	16	9	7	
3	下一段ヤ	114	102	12	
3	下一段ラ	18	7	11	
3	上一段力	9	5	4	
3	上一段ガ	18	10	8	
3	上一段タ	19	14	5	
3	上一段ハ	41	39	2	
3	上一段ヤ	9	5	4	
3	四段力	1		1	
3	四段サ	48	40	8	
3	四段ハ	277	271	6	
3	四段バ	5	5		
3	四段マ	12	7	5	
3	四段ラ	81	48	33	
4	下一段サ	8	8		
4	下一段ナ	8	5	3	
4	下一段ハ	3	1	2	
4	下一段マ	3	1	2	
4	下一段ヤ	17	16	1	
4	下一段ラ	52	47	5	
4	四段サ	2	2		
4	四段ハ	1	1		
4	四段ラ	3	2	1	
5	下一段ラ	1		1	
5	四段サ	3	1		2
5	四段ハ	15	15		
5	四段ラ	8	7	1	
総計		2287	2051	233	3

表1-4 下接語別の送り仮名表記

活用形	0	1 なし	2不 十分	3あり	4 語幹	総計
1う・よう	27	193		6		226
1未然	50	31		66	2	149
2た	76	126	4	19		225
2た・う				7		7
2た・つ				7		7
2て	75	233	1	53	1	363
2て・う				67		67
2て・つ				10		10
2助	40	55	3	63		161
2前	41	186		36		263
2中	1			7		8
2複	6	22		12		40
2名詞	15	33	1	47		96
3と		28		4		32
3べし		1				1
3終止	10	7	2	10		29
4連体形	102	290	30	133		555
5確条件	4	2	1	12		19
5逆条件				1		1
6命令	10			18		28
合計	457	1207	42	578	3	2287

表1-5 下接語別表記形式

活用形	1 漢字	2振 仮名	3 一部	総計
1う・よう	220	6		226
1未然	134	15		149
2た	206	19		225
2た・う	7			7
2た・つ	6	1		7
2て	305	56	2	363
2て・う	67			67
2て・つ	7	3		10
2助	123	37	1	161
2前	245	18		263
2中	8			8
2複	34	6		40
2名詞	73	23		96
3と	29	3		32
3べし		1		1
3終止	27	2		29
4連体形	514	41		555
5確条件	18	1		19
5逆条件	1			1
6命令	27	1		28
合計	2051	233	3	2287

